

木内博之，斉藤延人：監修
木内博之：編

プライム脳神経外科 1 脳動脈瘤

評者

嘉山 孝正（国立がん研究センター名誉総長・山形大学医学部先進がん医学講座特任教授）

プライム脳神経外科第1巻脳動脈瘤が出版されました。読んでみて，最初に感じたのは監修者，編集者の教育への情熱です。その情熱の結果が従来の教科書と比較して大変プラグマティック（実用的）な教科書になっています。現代の多忙な脳神経外科医にとってはプラグマティックな教科書が待たれていました。しかし，本書はプラグマティックなだけでなく，原理，原則をも包含している待ちに待った教科書と言えます。

医学の進歩は従来から日進月歩ですが，最近はその速度が加速度的に増量化しており，新たに生まれる医学，医療に関する情報は膨大です。したがって，日常業務に多忙な脳神経外科医にとっては，時間の無駄なく適切な医学，医療の情報を整理整頓し頭に入れることが，重要な能力の1つになっています。

一方，読者にコンセプト（原理原則）を理解させないでプラグマティック過ぎる教科書からは，応用が効かない脳神経外科医が育つような欠点があります。本書は監修者，編集者が欲張りすぎるほど，コンセプトとプラグマティック知識の両方が配分よく記載されています。

本書は原理原則と実用的な内容の両方が記載されているので，本教科書を読んだ脳神経外科医は最新の知識，技術が習得でき，さらに応用が利くようになると言えます。さらに加えるならば，最先端の概念的な知識だけではなく治療技術に関する情報も具体性をもって習得できるような教科書です。従来の教科書の多くは，テーマに絞った記述内容で占められていました。本書

の題名が脳動脈瘤であれば，手術手技に関する記載に偏っていたり，周期のことだけが記載されていたりした教科書が多かったのです。本書では，「破裂脳動脈瘤の患者さんを目の前にした時に知識として知っておかねばならない事物が，外来で診た時から治療終了まで」ほぼ時系列に則り記載されています。

各章を順番に追ってみてみましょう。第1章では，人生でどの年齢でどのような確率で本疾患に罹患するか等の「本邦における破裂脳動脈瘤の疫学」から始まります。さらに本章では，最新の知識が，医師が患者さんにお話する時に必要な内容として記載されています。例えば，「圧力損失係数」の原理や「遺伝子学的因果関係」等が挙げられます。第2章では手術術式の前に，術中に必須の各種モニタリングが記載されています。手術ができるようになる前に理解しなければならない手技です。この内容が手術術式より前に記載されていることが読者にとっては勉強するにあたり大変便利で親切です。第3章では，血管内治療が記載されていますが，本書の大きな特徴は医療機器に関する最先端の情報が入っていることです。各社の製品の機能や使用方法の記載が，加えて最新の研究結果：論文を十分理解可能な記載の仕方でも掲載されていることも本書の特徴の1つです。血管内治療では手技が大切ですが，本書ではその点でも現場でトラブルが起きた時の対処法が記載されています。現場感が満載と言えます。

第4章，第5章は，脳動脈瘤手術の所謂開頭法と動脈瘤の処置の仕方がアプローチ別：脳動脈瘤の部位別に大変

多くのイラストと写真を使用し説明しています。大変わかりやすくできていと言えます。先輩たちが営々と積み上げてきた「技術の伝承」もなされており，さらに，技術論の中で秀でていることは，失敗を検証し，その対策まで記載してある教科書は希少です。

第6章は，脳動脈瘤における血管内治療の解説が部位別に記載されておりますが，脳動脈瘤の部位別に，手技のコツをも含んで方法が説明されております。エキスパートが自身の経験のすべてを記載している感があり，大変勉強になります。

第7章，第8章は，工夫を要する脳動脈瘤の治療法に関する考え方とその方法が書かれています。若い脳神経外科医のみではなく中堅の先生方にも大変勉強になる内容です。

本書の特徴を纏めてみます。昨今，専門医制度が議論されておりますが，専門医とはある疾患の患者さんを目の前にした時に，その患者さんに適切な医療ができると定義できます。あるいは，その患者さんにその疾患で起きうることがすべて理解されていて，初めて専門医と言えます。本書は，監修者が強調しているように現場で実際に治療し，現場で起きる事象をすべて網羅的に解説できる著者を選んでいます。本書の内容は，専門医が要求されるすべてを網羅していると言えます。ぜひとも，ベテランは最新の知識を得るために，若い脳神経外科医は専門医のレベルの知識，技術に関する理解を深めるために読むことを推薦いたします。

A4判 頁352 2017年3月 三輪書店刊
定価：本体16,000円＋税
[ISBN978-4-89590-587-9]

